

北冥の魚

野村胡堂

一

「江戸中の評判なんですがね、親分」

「何が評判なんだ」

ガラッ八の八五郎が、何にか変なことを聞込んで来たらしいのを、銭形の平次は浮世草紙うきよぞうしの絵を眺めながら、無関心な態度で訊き返しました。

「両国の女角力おんなずもうと銭形の親分」

「馬鹿野郎、俺を遊ぶ心算つもりか」

平次は威勢の良いのを浴びせて、コロリと横になります。こうすると軒に這わせた、貧弱な朝顔がよく見えるのでした。

「ヘッヘッ、怒っちゃいけませんよ。ところでね、親分」

「何んだい、うるさい野郎だな。少し昼寝でもさしてくれ。——女角力を毎日覗いているような目出度い人間とは付き合いたくねエ。木戸銭だってまともに払っちゃいないだろう」

「冗談じゃありませんよ。女角力を見たのはたった三遍べんだけですよ」

「三遍見りゃたくさんだ」

「四遍も見ると、噓うそめが出る」

「呆れた野郎だ。そんなものへ俺を引き合いに出すのか」

「そんな心算つもりじゃありません。ね、親分、女角力はちよいと話のキツカケをつけただけで、今日は親分の学がくの方を借りに来たんですがね」

「ガク？」

「学問ですよ、親分」

「大層なものを借りに来やがったな。そうと知ったら、昨日あたり二三百文ほど仕入れておくんだったよ」

平次は仰向けに寝たまま、面白そうに笑っております。

「ね、親分、ひらめという字を知っていますか」

「ひらめやかれいに付き合いはないよ。鰻という字と、鯨という字なら看板で見て知ってるが、それでも間に合わせるわけには行かねエのか」

「ひらめですよ、親分。——日比魚と三字でひらめと読むか読まないかでんで、大変な騒ぎですよ」

「フーン」

平次は一向気の乗らない様子です。

「町内の手習師匠に訊くと、ひらめを四角な字で書くと比目魚となる。魚扁に平でひらめだが、日比魚と書いてひらめとは読まない——とこうなんで」

「それで解ってるじゃないか、俺の学なんか引合いに出すことがあるものか。魚扁に平はひらめさ、魚扁に丸くて長いのはどじょうで、魚扁に骨張っているのはほうぼう、物事はみんな理詰めだ」
「ところで遺言には日比魚と書いてあるんで。これは聖堂へ持つて行っただって読めないから不思議じゃありませんか。これが読めると、何万両という金になるんだが——」

「大層な事を言うじゃないか、日比魚が何万両になるといふ話をもっと詳しく話して見るが宜い」

平次もとうとう坐り直しました。ガラッ八の話術は近頃は一段

と冴えて、とかく不精になり勝な平次を事件の真ん中に誘い込む
コツを心得ているのです。

二

木場の旦那衆で、上州屋^{そうざえもん}莊左衛門が死んだのは、もう半歳も前のことですが、その蓄財^{ちくざい}——どう内輪に見ても、三万両や五万両はあるだろうと思われたのが、不思議なことに、何処^{どこ}を探しても小判一枚出て来なかったのです。

裕福な上州屋のことですから、御得意に大名方も三軒五軒、手持ちの材木もうんとあり、遺族^{いぞく}が困るの、店がどうのという事はなかったのですが、ともかく、うんとあるだろうと思われた現金がほんの当座の帳面尻を合せるだけ、二つの錢箱に少々ばかり入っていたのでは、身寄一統^{とう}、奉公人も世間の人も承知しません。

半年の間、番頭の有八^{さいはい}が采配^{さいはい}をふるって、文字通り床を剥がし、壁まで落して搜しましたが、小粒一つ出てこない有様です。こんなことで伴の莊太郎——今は上州屋の跡取りが、行儀見習という名目で、上州屋へ入って待機している武家出の許嫁^{いいなすけ}お道と祝言も出来ず、店の支配人をしている伯父の常吉、その娘のお信、莊太郎の弟の勇次郎まで、妙にこう対立的な氣持で、不安のうちに半歳を過してしまいました。

先代莊左衛門が生きているうちは、深川一円の評判になったほどの平和な家庭ですが——少なく見積もっても三万両の現金は、誰の手に入るだろうか——どうかしたら、誰かもう奪ってしまつたのではあるまいか——と言った疑いが、家中の空気をすっかり

陰惡にして、近頃はお互に隠し合ったり、睨み合ったり、何時何処で、どんな爆発的悲劇が起らないとも限らない情勢だったのです。

「何にか手掛りはないのか」

一と通りの説明を聴くと、平次はこう手繰りました。

「それが、そのひらめなんぞ」

「ひらめじゃない日比魚だろう」

「何んだか知らねえが、死んだ莊左衛門の手文庫の中に、この三字が書いて封じたのが入っていましたよ。上書は跡取りの倅の名前——莊太郎殿——他見無用と断ってあったが、莊太郎は人が良いから皆んなに見せてしまった」

「フーム」

「何しろ莊左衛門という人は、町人のくせに学問が好きで、小唄も碁将棋もやらないかわりに、四角な文字を読んで、唐の都々逸を作った」

「唐の都々逸てえ奴があるものか、詩だろう」

「その詩とか五とか言うのを高慢な友達とやり取りして喜んだという変り者だ。遺言だって並大抵の仕人物じゃ氣に入らねえ」

「外に何んにも言わなかったのか」

「卒中で一ぺんに片付いたんだから、長々と弁ずる隙がなかった」
八五郎の話は、途方もない話術ながら、面白く筋を運んでくれました。

「それをお前は、誰に頼まれて乗出したんだ」

「番頭の有八ですよ——尤も若主人の莊太郎も承知の上だと言いましたかね」

「宝搜しはイヤだが、ひらめから三万両手繰り出すのは面白いな」
「やって下さいよ、親分。うまく三万両見付かりやひと身上出し
（しんしょう）
ても宜い——つて番頭の有八が——」

「馬鹿野郎」

「へエー」

「金で人を釣って、三万両搜させようなんて、太い野郎だ」

「あつしじゃありませんよ、そいつは有八の言い草だ」

「だから断って来な。馬鹿馬鹿しい」

平次の癪にさわるのは、報酬に物を言わせようとするタチの
（ほうしゅう）
人種——どんな事でも金さえ出せばの氣でいる人間でした。

「驚いたなア、どうも」

「驚くことはあるめえ。ひと身上になるじゃないか。お前が勝手にやるが宜い」

「へッ」

ガラッ八は面喰らって飛出してしまいました。身上を拵える氣
（こぎ）
のないものは、どうも附き合いきれないとも思ったのでしよう。

三

それから二日目。

八五郎は『大變』の旋風（せんふう）を起して飛び込みました。

「さア、大變ッ、親分」

「また眼の色を変えて飛び込んで来やがる。御町内では馴れっこだが、江戸中大變を触れて歩かれた日にや皆んな胆（きも）を潰すぜ」

「大丈夫、路地へ入るまでは、大變のタの字も言わねえ。——何し

ろ大変ですぞ、親分」

「三万両の大判小判が見付かつて、お前がひと身上^{しんしやう}拵えたとしても
いうのかい」

「冗談——そんな気楽なんじゃありませんよ。何しろ人間が一人
殺されたんで——」

「何んだと、八」

「だから、あの時親分が乗出しゃ、こんな事にならずに済んだの
に、——親分は妙に意地っ張りだから——」

「まア、憤^{おこ}るなよ、八。誰が一体、どうして、誰に殺されたんだ」
平次は八五郎の鼻息の荒さに苦笑しながら、事件の興味に引摺^{ひきず}
られて行く様子です。

「それが解^とっていりゃ、深川から此^こ処まで飛んで来ませんよ」

「ホイ、また叱^しられたか。それにしても殺された人間は解^とるだろ
う」

「殺されたのは、若主人莊太郎の弟で、勇次郎という二十二にな
る男。——少し足が悪くて、あまり外へは出ないが、知恵の方なら
人の三倍も持っている男だ。——殺したのは判らねえが、あれは
鬼だね親分」

「虎^{とら}の皮^{かわ}の禪^{ふん}か何んか落ちて居たのか」

「そんな証拠は残さねえが、首を絞^しめて殺した上、生き返^{げん}っちゃ
悪いと思ったか、玄能^{げんのう}で頭を叩き割って行^いった」

「フーム」

「だから親分、ひと身上^{しんしやう}になるとは言わねえ。御上への御奉公、
役目の表、一つ行^いって見てやって下さい。下手人^{げしゅにん}が拵^とがつて三万
両の金が出た上、強^たってお礼をやるというなら、あっしが貰^{もら}って

家作を四軒建てる――」

「四軒は変だね」

「一軒には親分を入れて、一軒にはあつしが入って、あとの一軒には叔母さんを入れる。家賃なんか弥勒みろくの世までも呉れとは言わねえ」

「それじゃ三軒じゃないか、あとの一軒は？」

「ヘッ、ヘッ、そいつは言えねえ」

「馬鹿だなア」

そんな無駄を言いながらも、平次はついガラッ八におびき出されて、木場の上州屋まで行ってしまう。

その時は土地の岡っ引が三人、喜八に宗助に吉五郎というのが、宜い加減かき廻しておりましたが、さて何が何やら一向解らず、誰を縛ったものだろう――と言った、御上おかみ向きの体裁を考えて小田原評定に時を過していたのです。

「おや、銭形の」

吉五郎は一番先に、ガラッ八の案内で乗込んで来た平次を見付けて、ホッとした様子でした。

「八五郎に聴いたんだが、変なことがあったそうだね」

平次は如才じょさいなく三人に挨拶しました。

「まア見てくれ。銭形の兄哥なら見当が付くかも知れないが、何しろ大変な殺しだ」

吉五郎は先に立って、勇次郎の部屋へ案内してくれます。

母屋おもやから離れた二た間の一軒建で、もとは材木小屋の見張りに使った奉公人の住いでしたが、足が不自由で少し変屈へんくつで、学問にばかり凝こっている勇次郎は、多勢の家族といっしょに住んでいる

ことを嫌ってここで若隠居のような、悠々自適ゆうゆうじてきの生活をしているのでした。

「銭形の兄哥も聴いた筈だが、何んでも三万両とか五万両とかの、金のゆくえが判らないんだってね」

吉五郎は擦くすぐっ度たい顔をして見せます。

「そんな事を八が言って居たよ」

「その三万両——まあそれくらいはあるそうだが、何しろあんまり金高が大きいので、こちとらには見当も付かないが、それだけの金が財布や筆筒たんすへ入るわけではない。——」

「なるほど、財布や筆筒へは入らない——さすがに兄哥あにきはうまいところに気が付いたね。千両箱が一つ五貫目あるとしても三万両で百五十貫だ。それ程の大金がどこにあるのか判らないと言うのは可笑しいじゃないか」

「ところで昨夜判ったんだ」

「へエ——」

これは平次にも初耳でした。

「若主人の弟の勇次郎が、ゆうべ珍らしく母屋へ来て晩飯を皆んなど一緒にやりながら、——憚はばかりながら親父の遺した三万両の金はどこにあるか、判っているのは俺一人だろう。尤も俺だって最初から判っているわけじゃない。いろいろと工夫に工夫を積んで、半年目によく判ったんだ。学の力だね——と言ったそうだ」

「フーム」

「家中の者が皆んな乗出した。——何処にある、何処にある——という騒ぎ、勇次郎は落着き払って、俺もまだ見たわけじゃないが、隠した場所だけは確たしかに見当が付いた。兄さんが俺に半分くれる

と言え、明日にも教えてやる。足が不自由だから、俺には引出せない——とこう笑いながら冗談見たいに言っただそうだ」

「引出せない——と言っただね」

「そうだ。十人もの人間が聴いていたんだから間違いはない。弟の自慢を聴いて、一番喜んだのは兄の莊太郎だ。——それは有難い。お前には一生困らないだけの事をしてやりたいと思っていたから、三万両の半分なんてケチな事を言わなくても宜い。俺が継いだ上州屋の暖簾のれんと身上は三万や五万じゃないから、お父さんの隠して置いた金が見付かったら、それをお前に皆んなやろう——と言ひ出したんだそうだ」

「フーム、馬鹿か豪傑か、仏様だね」

「唯のお人好しさ」

そんな事を言っているうちに、先に立った八五郎は、中から勇次郎の部屋を開けて、縁側に立った平次に、慘憺さんたんたる有様を一目に見えるようにしてやりました。

四

離室はなれは戸締りが無かったので、案内知った者なら誰でも自由に入れたのです。

平次は部屋の四方から、家の構造をひと通り見て、地理的な関係を胸に畳んでから、膝行いざするように中に入って、慘憺さんたんたる死骸を、恐しく丁寧に見ました。まず死骸の側に投ほうり出してある玄能を見、首に巻付けた恐しく頑丈な綱を見、それから死骸の髪はえの生際ぎわ、眼瞼ひこうの裏、鼻腔、唇、喉などとひと通り見終って、何にかしら腑ふに

落ちないものがあるように首を捻ります。

「八、その戸棚と押入を見てくれ。酒の道具か、徳利のようなものはないか」

「何んにもありませんよ」

と八五郎。

「お勝手がなくて、食物は母屋から運んでいたんだそうだよ。母屋へ行って晩飯をやったのは、金の見付かった祝心と、皆んなをびっくりさせる心算だったんだろう」

吉五郎は注ちゆうを入れました。

「晩飯の後で、母屋からここへ食物か呑物を運んで来なかったか、——誰か用事か何にかで来たものはないか、——ゆうべ飯の後で外へ出た者は誰と誰で、出なかった者は誰と誰か、詳しく調べて来てくれ」

平次は八五郎に細々こまこまと言い付けて、それから今朝死骸を見付けたという、番頭の有八を呼びました。

「親分さん、御苦勞様で——私は有八でございます」
狐のような感じのする男です。

「いつか八五郎に——三万両の金を捜し出してくれたら、ひと身しん上しょうやると言ったのは、お前さんだね」

「いえ、そんなわけじゃございませんが——」

有八は恐しくヘドモドして居ります。三十七八の、材木屋の番頭だけに、小力のありそうな立派な身体です。

「ゆうべ飯の後で外へ出なかったのか」

「何処へも出ません。店先で手代の与三と若吉を相手に下手へ将棋しょうぎを六番も指しました」

「寝たのは？」

「亥刻過ぎでございました」

「お前は幾番指して、幾番勝ったんだ」

「与三と二番指して二番とも負けました」

「与三と若吉は？」

「二番ずつ指し分けになったようで」

そんな事を聴いたところで何んの足しにもなりません。

母屋へ行って支配人の常吉に逢って見ると、これも恰幅の好い五十男で、ひどく甥おいの勇次郎の死んだのが打撃だったらしく、大きな身体で打菱うちしおれているのは気の毒でした。

「実はね親分、従兄妹いとこ同士だけれども、私の娘のお信といっしょにして、末長く見て貰う筈でしたよ。足は悪かったが、知恵たくの逞たくましい、良い男で——」

そんな事を言うのです。昨夜は店から一步も外へ出ず、奥で甥の莊太郎と話しふかして、そのまま寝て了しまったという言葉に嘘があろうとも思われません。

若主人の莊太郎は、典型的な若旦那の生長したので、人の良いという外には何んの取柄があろうとも思われません。

「可哀想なことをしました。私が金を見付けたら皆んなにやると言っただのが悪かったのかも知れません」

そんな事に気の付く二十五歳の若主人が、決して馬鹿や豪傑でないことは、平次も承認しょうにんしないわけには行きません。

「そうとも限りませんよ。——ところで、勇次郎さんは、余っ程学問があつたようですね」

平次は外の事を訊ねました。

「父親は逍遙軒しょうようけんと言つて、詩しも作り歌もよみましたが、私はその方は一向いけません。弟は父親の学問好きを承うけて、これも四角な字を読んで居りました」

大店おおだなの主人らしい寛達かんたつさがありますが、弟の伶俐さを自慢にする人の良さ以外に、この莊太郎には大した取柄のないことがよく判ります。

つづいて若吉に逢い、与三に逢い、常吉の娘のお信に逢いました。これはまた恐いお俠きやんで、

「父さんはあんな事を言うけれど、私は勇次郎さんは大嫌い、歩くと唐白からうすを踏ふむようなんですもの。――でも殺されてしまっちゃ可哀想ねえ。早く下手人げしゅにんを挙げて下さいよ。物置から材木を引上げる時に使う五六間もある大綱を持出して絞め殺すなんて、随分ひどいじゃありませんか」

平次は何んにも訊かずに逃げ出してしまいました。

最後に逢ったのは、若主人莊太郎の許嫁で、客分あつかいで祝言の待期をしているお道という娘でした。少し老けて二十二、色の浅黒い、眼鼻立のよく整った、華奢な身体で、物腰しの上品さも物言いの聰明さも、上州屋の嫁として全く申分のない娘です。

「ゆうべ外へ出なかつたでしような」

平次の調子も、相手の品位に押されて物静かでした。

「ちよつと出かけました」

お道の言葉は予想外です。

「何処へ――」

「勇次郎様にお茶を差上げました」

「――」

「若旦那も御承知の上でございます。勇次郎様は御酒を召上らないので、ときどき薄茶うすちやを欲しいと仰しやいます」

「？」

「ゆうべも晩の御飯が済んでお帰りの時、後でお茶が欲しいが——と遠慮しいしい仰しやるので、下女の初やと一緒に離屋はなれへ参つて、薄茶を一服差上げて帰りました」

勇次郎に逢った最後の人でしょう。でも下女と一緒に行って一緒に帰ったという娘——この静かさと聰明さには、何んの疑問を挟む余地ありません。

下女のお初を呼んで訊くと、正にお道の言った通り、勇次郎の望みで、莊太郎の許しを受けて離室へ行き、薄茶を立てて、四半刻ほど経ったというだけの事でした。

五

「親分、晩飯の後で母屋おもやから出たのは、あのお道という娘一人ですよ」

八五郎の報告は平次の調べとピタリと一致しました。

「それで宜いよ」

と平次。

「尤もみんな寝鎮ねしずまってるから、脱出そうと思えば、誰でも自由に脱出せますがね」

「それも解ってる」

木場から引揚げて、平次と八五郎は永代橋を渡るのです。

「それじゃ下手人も解ったんですか、親分」

「解った心算だが、証拠が一つもない」

「誰です、親分」

「お前が考えたこともない人間だ。——その癖恐ろしい人間だよ」
「へエー」

「ところで、莊太郎とお道がなぜ祝言せずにいるか、本当のわけをお前知ってるかい」

「宝捜しのゴタゴタで——」

「そんな事もあるだろうが、本当のところは、あの祝言の邪魔じゃまをしている人間があるんだ」

「へエ、そんな野郎が居るんですか」

「野郎じゃない女だ、——お信が莊太郎の嫁になりたかったんだよ」

「へエー、あの転婆娘がね」

「それに親の常吉もその気だったかも知れない。勇次郎と一緒にしたかったと言ったのは嘘だ」

「成程ね」

「それから殺された勇次郎も、兄貴とお道の祝言には水を差していた。兄貴は人が好過ぎるが、お道は人間が伶俐りこう過ぎる。どうも二人は一緒にしても仕合せになりそうもない——と言うんだそうだ。これは奉公人が皆知っている」

「成程ね」

「それに番頭の有八も——」

「それじゃ店中皆んなじゃありませんか」

「でも本人同士は好きで好きでたまらないようだから、いずれ近いうちに祝言するだろうよ」

「おや？ 親分、何処へ行くんで？」

「八丁堀へ行つて見るよ」

「へエ——」

「あの殺しは、俺には解らない事だらけだ。笹野の旦那にお目にかかつてお知恵を拝借しよう。学者という奴は、こちらには苦手だね」

平次はそんな事を言いながら、与力筆頭笹野新三郎の組屋敷を訪ねました。^{たず}

「平次か、だいぶ顔を見せなかったな」

新三郎は若くて寛達で銭形平次の庇護者^{ひごしゃ}でした。

「旦那、お知恵を拝借に参りました。今度ばかりはまるつきり見当も付きません」

平次は笹野新三郎の学問と人柄には、日頃から推服^{すいふく}しきつていたのです。

「お前に解らないことが、俺^{わし}に解る道理はないよ。——だが、どんな事なんだ」

「ゆうべ殺しのあつた上州屋は、三万両からの金を遺^{のこ}して、その場所を誰にも教えずに死んでしまいました。が、手文庫の中の伴に宛てた遺言状らしい手紙に、日比魚^{ひいこ}とたった三字だけ書いてあつたそうです。これが大金の隠し場所を教える文句に違いありませんが、困ったことに、こちらでは一向解りません」

平次はさすがに打ちひしがれた調子です。

「待つてくれ。そいつは俺にも解りそうもないが、上州屋の名は何んとか言つたな」

「莊左衛門で御座います。四角な字を読むのが好きで、詩^しとか五

とかを作つて、逍遙軒と名乗つたそうで——」

「逍遙軒莊左衛門か。——成程」

笹野新三郎は首を傾けました。

「日比魚は比目魚か何にかで？」

「大違いだ。——その日比魚というのは、どうかしたら、魚扁に日比と書いた字を崩したのではあるまいかな。——魚扁に日比なら鯢こんという字だ」

「へエ——そんな字がありますんで？」

「あるよ。上州屋が逍遙軒莊左衛門と名乗るから氣が付くんだ。

あの鯢こんという言葉は、支那の莊子そうしという本の一番始め、『逍遙遊第一』というところに出ている。その文句は『北冥ほくめいに魚あり、その名を鯢こんとなす。鯢こんの大さその幾千里なるを知らず』と——ある」

「つまりねえものを引合に出したもので——」

平次は口惜くやしそうでした。

「その後がまた面白い」

「へエー、もう少し読んで下さいませんか」

「つまり、その鯢くじらという鯨のような魚が、鳥になつて今度は鵬ほうというものになり、南冥なんめいというところに飛んで行く、——南冥は天てん池也ちなりと断つてある、つまり天の池だな」

「すると鯢の住んでいる北冥めいというのは何でしょう」

「北の海だ、冥は溟也めいなりとある。——その北の海に鯢こんという魚が居るのだ」

「すると、北の海を捜しや宜いわけですね」

「その通りだ」

「有難うございます。どうも学問には叶かないません。尤もこれだけ

附け焼刃の知恵でも持って行けば、もう悪賢こい下手人なんかには負けません」

平次は独り言をいいながら、新三郎の前を退しりぞきました。

六

「八、解ったぞ」

「親分」

室の外で待っていた八五郎は、平次の顔に動く勝利感を見て、ホッと安心したのです。此処へ来るまでの平次の顔色は全く今まで八五郎が見たこともないような陰悪なものでした。

そこから木場きばへ引返したのは、もう夕陽が町を染める頃。

「この家の北の方には何があるんです」

平次はいきなり支配人の常吉にこんな事を訊きました。

「北海庵という庵室ですよ、——兄が寄進して十五六年前に建てた堂ですが、庵主が死んで、そのまま立ち腐れ同様になっていますが——」

「其処だ」

平次が飛付こうとするのを、常吉はあわて加減かげんに止めました。

「其方そっちからは行けませんよ。厚い生垣いけがきがあつて、北へ行くには南の方へ出て、屋敷をグルリと一と廻りするんです」

争うべき筋合もないので、平次は常吉の導くまま、生垣をグルリと廻って、裏口へ出ました。

おびただしい材木を漬けた堀の縁を通って、北側の庵室——北海庵の前に立った平次は、あまりにも荒れ果てた様子に、少な

らずがっかりさせられた様子です。

「親分、北冥ほくめいの魚でしょう。鯉でも鮒ふなでも構わないが、此処さかなに魚がありさえすりゃ、三万両と転げ込むんだが、無住になった寺方じゃ、鰯いわしの頭もねえ——」

「黙らないか、八」

平次は八五郎の饒舌じょうぜつを封じて、凝じつと庵室の中を見廻しました。「だって親分、ここに魚なんかいるわけはないじゃありませんか」「あれは何んだ」

平次の指は真っすぐに、仏壇の前に据すえた禿はげちよろの木魚もくぎよを指さしているのです。

「なるほど木魚とはよく附けた——魚に違ちがえねエ」

八五郎は飛んで木魚を押えました。こいつが下手人ででもあるかの意気込みですが、禿はげちよろの木魚は八五郎が考えた業わざをする代物しろものとは思えません。

「木魚の中を見るんだ」

「へエー」

引っくり返すとカラカラと鳴って、やがて転がり出たのは、丈夫そうな鍵です。

「それをどうするんで、親分」

「南冥なんめいへ行くんだ。天池てんちともいう。——そこに鵬ほうという鳥ぎようずいが行水ぎようずいを使っている」

その時は、もう上州屋の家族が全部そこに集まって、銭形平次の動きを好奇と、不安とで見詰めておりました。

平次はその人達の視線に送られて、上州屋の離屋——ゆうべ勇次郎が殺された部屋の前まで行くと、ささやかな池のほとりに据

えた、不似合に大きな青銅の水盤すいばんに気が付きました。その形は多少怪異なものですが、水盤の真ん中に立ったのは、正しく鳳凰ほうおうの飛躍的な姿です。

平次はその鳳凰の飾りを抜くと、その下にある鍵穴に、木魚から取出した大鍵を入れました。見当さえ付けば謎を解くのは大道を行くようなものです。

カチリと音がして、平次の手に従って巨大な水盤は動きます。その跡にポカリと口を開いたのは何と人間が二人くらい楽々と通れるほどの大きな穴、しかも夕陽に照らされて、階子段はしごだんまでがありありと見えているではありませんか。

「御主人はこの中へ降りて見て下さい。中には三万両の小判がある筈だ。穴倉あなぐらはちょうど池の下になっているでしょう」

「――」

莊太郎はさすがに脅おびえて尻ごみしました。

「もう危ないことは少しもありません。あっしが一緒に行って上げましょう」

提灯を借りて先に立ちました。

つづいて若主人の莊太郎。

やや暫く降りると、三畳ほどの小さい部屋になって、四壁にぎつしりと千両箱が積んであります。その数はざっと三十七八。

「これを皆んな弟にやる心算つもりだったのに」

莊太郎は暗然としました。

「御主人、あなたは仏様のような方だ。その心掛が、あなたを救ったんですよ、それ――」

平次が指さした壁の上、ちょうど二人の帰り途を塞ふさぐように、



どっと一条の巨大な水柱が奔出^{ほんしゅつ}して来たのです。

「あッ」

驚く莊太郎を、平次は軽く押えました。

「もう大丈夫、それ水が止まったでしょう。八五郎が悪者を捉ま^{つか}えたのです」

「帰りましょう。親分」

「もう帰る途も開いた筈です」

「えッ」

「二人ここで三万何千両の小判と一緒に水漬りになるところでしたよ」

平次はそう言って、莊太郎を促^{うなが}しながら、もとの離屋の前へ帰りました。

「親分」

ガラッ八は飛付きました。

「下手人はどうした」

「あの女ですよ。あんまりびっくりしているうちに、あの女が穴の入口を塞いで水門を開いたんです」

「だからあれほど気を付けるようにと言って置いたじゃないか、下手人はどうした」

平次は何も彼も見徹していたのでしよう。

「少しの手遅れでした」

「何処だ」

「離室へ飛んで戸を閉めてしまったんです」

「それも宜かろう。が、放って置けない。さア」

平次は八五郎らと力を合せて、離室の戸を打ち破りました。中へはいると、

「あっ」

血潮の海の中に、莊太郎の許嫁お道は、懷劍で見事に自殺していたのでした。

×

×

帰る途々、ガラッ八の燃える好奇心に釣られて、平次は簡単に説明してやりました。

「勇次郎の死骸は、殺し方があんまり念入り過ぎたので、毒害したのを誤魔化すためだと思ったよ。瞳孔が散っているし、絞め殺したにしては上気していないし、舌の色が変わって居るし、毒害は間違いないと思った」

「――」

「それをわざと物置から持出した大綱で絞めて、玄能で頭を割る

のは細工が過ぎて本当らしくない。自分の非力を隠して、どこまでも他の男がやったように見せる気さ。——俺は最初から女の毒害と思っていたな」

「へエー」

「ゆうべ、晩飯の後で離室へ入ったのはお道だけだ。下女といっしょに行つて、茶を立てたのを隠そうともしなかったのは、あの女の太いところさ。そのとき勇次郎の口占くちうらを引いて、謎の意味を大方覺つたに違いない——お茶に入れた毒に當つた頃もう一度そつと行つて、いろいろの細工をしたのは、恐ろしい胆つ玉だ」

「なんだつて女のくせに勇次郎を殺す氣になつたのでしょうか」

「勇次郎がお道の性根を見抜いて、兄に祝言をさせないように仕向けていたんだらう。それに三万両の大金を勇次郎が見付けると、人の好い莊太郎は皆んなやると言った。——お道にしては、ゆくゆく自分の物になる金を、みすみす勇次郎に横取られるような氣だつたんだらう」

「そんなに解っているなら、なぜもつと早く縛らなかつたんで——」

「証拠が一つもなかったよ。あのお道というのは、恐しい女だ。

——そこで、笹野の旦那に教えて頂いて、三万両の謎なぞを解き、次第次第に金の隠し場所に近づきながら、お道の顔色を見ていたのさ。お道はあの晩、勇次郎から何もかも聴いているに違いない。勇次郎は学問はあつたが物を隠しておけない氣楽な氣性の男だつた。

——宝の穴庫あなぐらへ主人の莊太郎を誘さそい入れたのは、お道に細工をさせて、動きの取れないところを押えるためさ」

「へエー」

「それをお前がヘマして、殺してしまっちゃ何んにもならない」
「相済みません」

ガラッ八はペコリとお辞儀をしました。

「まア宜いやな、その方が反^{かえ}って宜かったかも知れない。三万両出て見ると、ひと身上呉れるとは誰も言わないだろうよ。後で五両や三両のお礼を持って来たって、手を出すんじゃないよ。——お前が家作を四軒建て兼ねたのは気の毒だが、まアまア諦^{あきら}めるが宜い」

「ヘッ」

「家賃の苦勞をするのも、世渡りの張合いになって悪くないよ」
平次はそんな事を言いながら夕闇の町を神田の家へ急ぐのでした。

そこに女房が、一合工面^{くめん}して、首を長くして待っているのです。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十五年九月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第六卷 河出書房 昭和三十一年七月三十日初版

編集・発行 錢形俱樂部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>